

さる九月に乘四カ月、ご覧いただいた私の「中国情報」は、今回で一応担当を交代することになった。そこで、今回は情報の要案からはちや離れるが、毛沢東の政治と中国民衆の政治意識について私の意見を提出し、一応の締めくくりにしてみた。

毛沢東はこの十月二十六日満八十歳になった。思えば一九三五年に長征途上の中国共産党選機(ピン)

中国情報

中 嶋 嶺 雄

毛沢東の栄光と悲劇

いま、その地点に立つ

①会議で、党内指導権を確立して欲しい、革命の運

たう、毛沢東の心算はこのようではなかったのではないだろうか。

それにして毛沢東は、その晩年に至って、自らの生存中におおむね多くのことを決着しようとして過ぎた生涯がある。

そもそも中国人は伝統的に同時代史を願望しない。その時代の評論は次の時代の人々によってゆたねるのが中国人の伝統的な歴史観であった。同時に中国人は「帝力我に何をあらんや」の一句に示されるように、伝統的に政治に多くを期待しない民族である。

れた第三世界の友人という親近感からであつたのだろうか、かなりの弱気的心境を吐露した。そしてその孤独を語り、権力の集中とということがいかに重要であり、また困難なことであるかを切々と説いたこと

これは政治のきびさち腐敗のゆゑではない。もっと深いところで文明の農業性を共有している中国人は、政治の爲し得る限界を本能的に知っており、すべてを政治に期待するのではなくて権力(帝力)が爲し得る領域と、農村協同体が相互扶助的の爲し得る領域とを知り、それを区別しているからである。

毛沢東は、このような中国人の伝統的な政治意識を全面的に変革しようと思つたのかも知れないが、それはどうも不可能であつた。

「毛沢東崇拜」があつたように進言したり、ひとたび林彪が悪玉にされると、全国民衆がそれにならうかに見える一元的体制は一種の擬制であり、それはある意味で中国人の伝統的な政治不信の逆説的な証明ではないだろうか。この点において毛沢東政治は中国人の伝統的な政治意識を変革することに成功したといえるのかどうか、大いに疑問なのである。

栄光の人ほど悲劇的な最期を辿るといふ歴史のジンクスは、毛沢東にはあつてはまらないだろうが、今日の彼自身がすでに栄光と悲劇の共存する地点に立っていることはまた疑いないところである。

(東京外大助教、中嶋嶺雄氏の本欄執筆は一応今回で終わり、新年次回からは、中国問題評論家、桑原寿一氏が担当します)

か例をみないであらう。だが、その毛沢東もさる四月に訪したエチオピア・メキシコ大統領に対しては、ラテン・アメリカからはじめて訪